

みさごの鮨

泉鏡花

青空文庫

「旦那さん、旦那さん。」

目と鼻の前に居ながら、大きな声で女中が呼ぶのに、つい箸の手をとめた瘦形の、年配で——浴衣に貸広袖を重ねたが——
人品のいい客が、

「ああ、何だい。」

「どうだね、おいしいかね。」

と額で顔を見て、その女中はきよろりとしている。

客は余り唐突なのに驚いたようだった。——少い経験にしろ、

数の場合にしろ、旅籠はたごでも料理屋でも、給仕についたものから、こんな素朴な、実直な、しかも要するに猪突ちよとつな質問を受けた事はかつてない。

ところで決して不味まずくはないから、

「ああ、おいしいよ。」

と言つてまた箸はしを付けた。

「そりや可いい、北国ほっこく一だろ。」

と洒落しやれでもないようで、納まった真顔である。

「むむ、……まあ、そうでもないがね。」

と今度は客の方で顔を見た。目鼻立は十人並……と言うが人間並で、色が赤黒く、いかにも壮健じょうけんそうで、口許くちもとのしまつたは

可いが、その唇の少し尖つた処が、化粧損つた狐のようで、し
 かし不気味でなくて愛嬌がある。手織縞のごつごつした布
 子に、よれよれの半襟で、唐縮緬の帯を不状に鳩胸に高くしめ
 て、髪はつい通りの束髪に結っている。

これを更めて見て客は気がついた。先刻も一度その（北国一）
 を大声で称えて、裾短な脛を太く、臀を振つて、ひよいと踊
 るように次の室の入口を隔てた古い金屏風の陰へ飛出して行つ
 たのがこの女中らしい。

ところでその金屏風の絵が、極彩色の狩野の何某在銘で、玄
 宗皇帝が同じ榻子に、楊貴妃ともたれ合つて、笛を吹いている処
 だから余程可笑しい。

それは次のような場合であつた。

客が、加賀国山代温泉やましろのこの近江屋おうみやへ着いたのは、当日ひる午少

し下る頃だつた。玄関へ立つと、面長で、柔和やわらかなちつとも気取きどり

つけない四十ぐらいな——後で聞くと主人だそうで——質素な

男が出迎えて、揉手もみでをしながら、御逗留ごとうりゆうか、それともちよつと

御入浴で、と訊きいた時、客が、一晩お世話に、と言うのを、腰を

屈かがめつつ畏かしこまつて、どうぞこれへと、自分で荷物を捌さばいて、案内を

したのがこの奥の上段の間で。次の室まが二つまで着いている。あ

いにく宅は普請中ふゆきとどきでございませうので、何かと不行届ふゆきとどきの儀は御容

赦ごゆつく下さいまして、まず御緩りごゆつくと……と丁寧ていねいに挨拶あいさつをして立つ

と、そこへ茶を運んで来たのが、いま思うとこの女中らしい。

實は小春日こはるびの明あかるい街道から、衝つと入ったのでは、人顔も容ようす子も
 何も分らない。縁を広く、張出しを深く取った、古風で落着いた
 だけに、十畳へ敷詰めた絨じゆうたん毯んの模様も、谷へ落葉を積んだよ
 うに見えて薄暗い。大きな床の間の三幅さんぶくつ対いも、濃い霧の中に、
 山が遥はるかに、船もあり、朦朧もうろうとして小さな仙人の影が映さすばかり
 で、何の景色だか、これは燈あかりが点ついても判はつきり然分はつきりらなかつたくら
 いである。が、庭は赤土に薄日がさして、塔形の高い石燈籠いしどうろうに、
 苔こけの真蒼まつさおなさびがある。ここに一樹、思うままの松の枝ぶりが、
 飛石に影を沈めて、颯さつと渡る風に静寂な水の響ひびきを流す。庭の正面
 がすぐに切立きつたての崖で、ありのままの雑木林に萩はぎつつじの株、も
 みじを交せて、片隅なる山筐の中を、細く蜿うねり蜿うねり自然の大巖おおいわ

を削った径こみちが通じて、高く梢こずえを上あがつた処ところに、建出しの二階、三階はなれ家の座敷があつて、廊下かけはしが棧のぞのように覗のぞかれる。そのあたりからもみじ葉越しに、駒鳥こまどりの囀さえずるような、芸妓げいしやらしい女の声こゑがしたのであつたが――

入いれかわ交わつて、齒はを染めた、陰気な大年増ふすまぎわが襖ふすまぎわ際わきへ来て、瓶びん掛んかけに炭すすを継いで、茶道具を揃そろえて銀瓶ぎんびんを掛けた。そこが水屋くたんの

ように出来できていて、それから大廊下へ出入口ぐちに立てたのが件の金屏風きんびやう。すなわち玄宗と楊貴妃で、銀瓶ぎんびんは可いいけれども。……次に

また浴衣どてらに広袖ひろそでをかさねて持つて出た婦おんなは、と見ると、赭あから顔かほで、太だ々だとした乳母おんぼどんで、大縞おほびらのねんね子こ半纏はんてんで四つぐらいな男この児おぶを負おぶつたのが、どしりと絨毯じやうたんに坊主枕ぼうしほどの膝ひざをつくくと、

半纏の肩から小児こどもの顔を客の方へ揉出もみだして、それ、小父おじさんに

(今日は)をなさいと、顔と一所に引傾ひっかたげた。

学士が驚いた——客は京の某大学の伝語ふつごの教授で、榊三吉さかきと云

う学者なのだが、無心の小児に向つては、盗賊もあやすと言う：

：教授でも学者でも同じ事で、これには莞爾にこにこ々々として、はい、

今日は、と言つた。この調子で、薄暗い広間へ、思いのほかのも

のが顕あらわれるから女中も一々どれが何だか、一向にまとまりが着か

なかつたのである。

昼飯ひるの支度は、この乳母うばどのに逃あつらえて、それから浴室へ下りて

一浴ひとあみした。……成程、屋の内は大普請らしい。大工左官がそち

こちを、真昼間まっぴるまの夜討ようちのように働く。……ちよやうな、鋸のこぎり、鉄かなづ

鎚ちの賑にぎやかな音。——また遠く離れて、トントントントンと俎まないたを

打つのが、ひっそりと聞えて飴こだまする……と御馳走ごちそうに鶯つぐみをたたくな、

ときもしい話だが、四高（金沢）にしばらく居たことがあつて、

土地の時のものに予備知識のある学者だから、内々御馳走を期待しながら、門から敷石を細長く引込んだもとの大玄関を横に抜け

て、広廊下を渡ると、一段ぐつと高く上る。座敷の入口に、いか

にも（上段の間）と札に記してある。で、金屏風の背後うしろから謹ん

で座敷へ帰つたが、上段の室まの客にはちと不釣合な形に、脇きようそ

息くを横倒しに枕して、ごろんとながくなると、瓶掛の火が、も

みじを焚たいたように赫かっと赤く、銀瓶の湯気が、すらすらと楊貴妃

を霞ませる。枕もとに松籟しょうらいをきいて、しばらく理窟も学問も

なくなつた。が、ふと、ひる昼飯の膳ぜんに、ひとちようし一銚子添えさせるのを言
 忘れたのに心づいて、そこでたちあが起上つた。

どこを探しても呼よびりん鈴が見当らない。

二三度手をたた敲いてみたが——これは初めから成算がなかつた。

勝手がだいぶ大分に遠い。座敷の口へ出て、敲いて、敲きながら廊下を
 また一段下りた。

「これは驚いた。」

更に応ずるものがなかつたのである。

一体、山代の温泉のこの近江屋は、大まかで、もの事おつとり
 して、いま式に余り商売にあせらない旅館だと聞いて、甚だ嬉し
 くて来たのであるが、これでは余り大まか過ぎる。

何か、茸きのこに酔つた坊さんが、山奥から里へ迷出たといった形で、手をたたき、たたき、例の玄関の処へ出て、これなら聞えようと、また手を敲こうとする足許あしもとへ、衝立ついたての陰から、ちよろりと出たのは、今しがた乳母どのおぶわられていた男の児で、人なつツこく顔を見て莞爾にこにこ々々する。

どうも、この鼻尖はなさきで、ポンポンは穩おだやかでない。

仕方なしに、笑つて見せて、悄悄すずすず々と座敷へ戻つて、

「あきらめろ。」

で、所在なさに、金屏風の前かしこまへ畏つて、吸子きゆうすに銀瓶の湯を注いで、茶でも一杯と思つた時、あの小児こどもにしてはと思つ、大おおきな躰あしおとが響いたので、顔を出して、むこうを見ると、小児と一所に、

玄関前で、ひよいひよい跳ねている女があつた。

「おおい、姉さん、姉さん。」

どかどかどかと来て、

「旦那さんか、呼んだか。」

「ああ、呼んだよ。」

と息を吐いて、

「どうにかしてくれ。——どこを探しても呼鈴はなし、手をたたいても聞えないし、——弱つたよ。」

「あれ。」

と首も肩も、客を圧して、突込むように入つて来て、

「こんな大い^{でけ}内^で、手を敲いたつて何が聞えるかね。電話がある

でねえか、それでお帳場を呼びなさいよ。」

「どこにある。」

「そら、そこにあるがね、見えねえかね。」

と客の前から、いきなり座敷へ飛込んで、突立状つたちざまに指したゆびさのは、床の間傍わきの、櫥子れんじに据えた黒檀こくたんの机の上の立派な卓上電話であつた。

「ああ、それかい。」

「これだあね。」

「私はまたほんとうの電話かと思つていた。」

「おお。」

と目を円くして、きよろりと視みて、

「ほんとの電話ですがね。どこか間違つたところでもあるのかよ。」

「いや、相済まん、……間違つたのは私の方だ。——成程これで

呼ぶんだな。——分りました。」

「立派な仕掛しかけだろがねえ。」

「立派な仕掛だ。」

「北国一だろ。」

——それ、そこで言つて、ひよいひよい浮うき足あしで出て行くゆ処を、
背後うしろから呼んで、一銚子を誂うしろえた。

「可いいのを頼むよ。」

と追掛けに言つと、

「分つた、分つた。」

と振り向いて合がってん点々々をして、

「北国一。」

と屏風の陰で腰を振って、ひよいと出た。——その北国一を、
ここでまた聞いたのであつた。

二

「まあ、御飯をかえなさいよ。」

「ああ……御飯もいまかえようが……」

さて客は、いまでの話の口が解ほどけたと思ふらしい面おももち色して、
中休みに猪口ちよくの酒を一口した。……

「……姐ねえさん、ここの前を右へ出て、大な絵はがき屋おおきだの、小料理屋にぎやかだの、賑な処を通り抜けると、旧街道のようで、町家まちやの揃った処がある。あれはどこへ行く道だね。」

「それはね、旦那さん、那谷なやから片山津かたやまづの方へ行く道だよ。」

「そうか——その中ほどに、さきが古道具屋と、手前とうゆすが桐油とうゆ菅笠屋げがさやの間に、ちよつとした紙屋があるね。雑貨も商っている……

……あれは何と言う家うちだい。」

「白粉おしろいや香水も売っていて、罐詰かんづめだの、石鹼箱はびかびかするけど、じめじめとした、陰気な、あれかあね。」

「全くだ、陰気な内だ。」

と言って客は考えた。

「それは、旦那さん——あ、あ、あ、何屋とか言ったがね、忘れたよ。口まで出るけども。」

と給仕盆を鞆まりのように、とんとんと膝を揺ゆつて、

「治兵衛坊主の家ですだよ。」

「串じょうだん戯ごではない。紙屋で治兵衛は洒落ではないのか。」

「何、人が皆そう言うでね。本当の名だか何だか知らないけど、治兵衛坊主で直じきと分るよ。旦那さん、知っていなさるのかね、あの家を。」

客は、これより前さき、ちよつと買ものに出たのであつた。——実は旅の事欠けに、半紙に不自由をしたので、帳場へ通じて取寄せ

ようか、買いに遣^やろうかとも思ったが、式^{かた}のごとき大まかさの、
 のんびりさの旅館であるから、北国一の電話で、呼寄せていいつ
 けて、買いに遣^{ひま}つて取寄せる隙に、自分で買って来る方が手取^{てつとり}
 早い。……膳^{ばや}の来るにも間があるう。そう思ったので帽子も被^{かぶ}
 らないで、黙^{だんま}りで、ふいと出た。

直き町の角の煙草屋^{たばこや}も見たし、絵葉がき屋も覗^{のぞ}いたが、どうも
 その類のものが見当らない。小半町行^ゆき、一町行^ゆき……山の温泉^{いでのゆ}
 の町がかりの珍しさに、古道具屋の前に立ったり、松茸の香を聞
 いたり、やがて一軒見附けたのが、その陰気な雑貨店であつた。
 浅い店で、横口の奥が山のかぶさつたように暗い。並べた巻紙の
 上^{うわづつみ}包^あの色も褪^あせたが、ともしく重ねた半紙は戸棚の中に白か

った。「御免なさいよ、今日は、」と二三度声を掛けたが返事をしない。しかしこんな事は、金沢の目貫めぬきの町の商店でも、経験のある人だから、気短きみじかにそのままにしないで、「誰か居ませんか」と、もう一度呼ぶと、「はい、」とその時、媚なまめかしい優しい声がして、「はい、」と、すぐに重ね返事が、どうやら勢いきおいがなく、弱々しく聞えたと思うと、挙動こなしは早く褻つまを軽く急いだが、裾すそをはらりと、長襦袢ながじゆばんの艶えんなのが、すらすらと横歩きして、半襟も、色白な横顔も、少し俯向うつむけるように、納戸から出て来たのが、ぱつと明るみへ立つと、肩から袖が悄しおれて見えて、温室のそれとは違って、冷い穴蔵から引出しでもしたようだった、その顔を背けたまま、「はい、何を差上げます。」と言う声が沈んで、泣いて

いたらしい片一方の目を、俯向けに、べにいり紅入ゆうぜん友染の裏があさぎ浅葱の袖口で、ひつたりおさ压えた。

中脊で、もの柔かな女の、ふっさ房り結つた島田がもつ纏れて、おつとりした下ぶくれの頬にかかつたのも、もの可哀あわれで気の毒であつた。が、用を言うと、「はい、」と背後うしろむきに、戸棚へ立つた時は、目を压えた手を離して、すらりとなつたが、半紙を抽出ひきだして、立返る頭髪かみも量おもそうに棲さきの運びとともに、またうなだれて、堪兼ねた涙が、白く咲いた山茶花さざんかに霜の白粉おしろいの溶けるばかり、はらはらと落つるのを、うっかり紙にうけて、……はつと思つたらしい。……その拍子に、顔をかくすと、なお濡れた。

うっかり渡そうとして、「まあ、」と気づいたらしく、「あれ、

取換えますから、」——「いや、宜よろしい。……」

懷ふところ中へ取つて、ずっと出た。が、店を立離れてから、思うと、

あの、しおらしい女の涙ならば、この袂たもとに受けよう。口紅の色は

残らぬが、瞳の影とともに玉を包んだ半紙はここにある。——ち

よつとは返事をしなかつたのもそのせいだろう。不思議な処へ行

合せた、と思ううちに、いや、しかし、白い山茶花のその花片はなびら

に、日の片あたりが淡くさすように、目が腫はれぼつたく、殊に圧え

た方の瞼まぶたの赤かつたのは、煩らつているのかも知れない。あるい

は急に埃ほこりなどが飛込んだ場合で、その痛みに泣いていたのかも分

らない。——そうでなくて、いかに悲痛な折からでも、若い女が

商いに出てまで、客の前で紙を絞るほど涙を流すのはちと情に過

ぎる。大方は目の煩いだろう。

トラホームなぞだと困る、と、その涙をとにかく内側へ深く折込んだ、が。——やがて近江屋へ帰って、敷石を奥へ入ると、酒の空樽あきだる、漬もの桶おけなどがはみ出した、物置の戸口に、石屋が居て、コトコトと石を切る音が、先刻期待した小鳥の骨をたた敲くのと同一であつた。

「——涙もこれだ。」

と教授は思わず苦笑して、

「しかし、その方が僥倖しあわせだ。……」

今度は座敷に入つて、まだ坐るか坐らないに、金屏風の上から、ひよいと顔が出て、「腹おなかが空いたろがね。」と言うと、つかつか

と、入つて来たのが、ここに居るこの女中で。小脇に威勢よく引ひつかか抱えた黒塗くろぬりの飯櫃めしびつを、客の膝の前へストンと置くと、一ひとあ歩しすさびつたままで、突立つたつて、熟じつと顔を瞰みおろ下すから、この時も吃びつくり驚おどろした目を遣ると、両手を引込めた布子の袖を、上下に、ひよこひよこことゆさぶりながら、「給仕をするかね、」と言つたのである。

教授はあきらめて落着いて、

「おいおいどうしてくれるんだ——給仕にも何にもまだ膳が来ないではないか。」

「あツそうだ。」

と慌あわてて片足を挙げたと思うと、下して片足をまた上げたり、

下げたり。

「腹が空いたろで、早くお飯まんまを食わせようと思うたでね。急せいた

わいな、旦那さん。」

と、そのまま跳はねまわ廻まわったかと思うと。

「北国一だ。」

と投げるように駈かけ出した。

酒は手酌が習く慣せだと言つて、やつと御免ごうむを蒙かつたが、はじめ

落着いて、酒量の少い人物の、一銚子を、静しずかに、やがて傾けた頃、

屏風の陰から、うかがいうかがい、今度は妙に、おっかなびつく

りといった形で入つて来て、あらためてまた給仕についたのであ

つた。

話は前後したが、涙の半紙はここにあつた。客は何となく折を見て聞いたのである。

「いましがたちよつと買ものをして来たんだが、」

と言継いで、

「彼家あそこに、嫁さんか、娘さんか、きれいな女が居るだろう。」

「北国一だ。あはははは。」

と、大声でいきなり笑つた。

「まあまあ、北国一としておいて、何だい、娘かい、嫁さんかい

。」

また大声で、

「押惚おっほれたか。旦那さん。」

「驚おどかしなさんな。」

「吃驚びっくりしただろ、あの、別嬪べっぴんに。……それだよ、それが小春こはる

さんだ。この土地の芸妓げいしやでね、それだで、雑貨店の若旦那を、

治兵衛坊主と言うだてば。」

「成程、紙屋——あの雑貨店の亭主だな。」

「若い人だ、活いきるわ、死ぬるわという評判ものだよ。」

「それで治兵衛……は分つたが、坊主とはどうした訳かね。」

「何、旦那さん、癩癩かんしゃくもち持もちの、嫉妬やきもちやきで、ほうずもねえ逆の

気性ほせしやうでね、おまけに、しつこい、いんしん不通だ。」

「何?……」

「隠元豆、田螺たにしさあね。」

「分らない。」

「あれ、ははは、いんきん、たむしだてば。」

「乱暴だなあ。」

「この山代の湯ぐらいでは埒らちあかねえさ。脚気山かつけやまなか中、かさ粟津あわづ

の湯へ、七日湯治をしねえ事には半月十日寝られねえで、身体中からだ

搔かきむし筆ひつつて、目が引釣り上る若旦那でね。おまけに、それが小春

さんに、金子かねも、店も田地までも打込ぶちこんでね。一いつとき時は、三月ば

かりも、家へ入れて、かみさんにしておいた事もあつたがね。」

—— 初うい女にようぼう房、花嫁ぶりの商いはこれで分つた——

「ちやんと金子を突いたでねえから、抱えぬしの方で承知しねえ

だよ。摺すった揉もんだの拳こぶし句が、小春さんはまた棲つまを取とっているだ
 がね、一度女房にした女が、客商売で出るもんだで、夜よがふけて
 でも見みなさいよ、いらいらして、逆のぼせ氣あが上あつて、痛いた痒がゆい処ところを引ひ
 搔つかいたくらいでは埒あかかねえで、田いにしも隠ひそ元もと豆まめも地ちだんだを踏ふ
 んで喰くい噛かるだよ。血ちは上あずつても、性しやうは陰いん氣きで、ちり蓮れん華げの長なが
 い顔あおが蒼あおしよびれて、しやくれてさ、それで負まけじ魂たまで、張た立たて
 る治ち兵へい衛ゑだから、人ひとにもものさ言う時は、頭あたまも唇くちびるも横よこ町まちへつん曲ま
 だ。のぼせて、頭あたまばつかり赫かっかっ々と、するもんだで、小春さんの
 いい人で、色いろ男おとこがるくせに、頭あたま髪かみさ、すべりと一分いちぶん刈きにしている
 処ところで、治ち兵へい衛ゑ坊ぼく主しゅ、坊ぼく主しゅ治ち兵へい衛ゑだ、なあ、旦那。」

かくと聞きけば、トラホーム、目の煩わづいと思おもつたは恥はかしい。袂たもと

に包んだ半紙の雫は、まさに山茶花の露である。

「旦那さん、何を考えていなさるだね。」

三

「そうか——先刻さつき、買ものに寄つた時、その芸妓げいしやは泣いていたよ。」

「あれ、小春さんが坊主の店に居ただかね。すいても嫌うても、
 気立きだての優しいお妓こだから、内証ないしよで逢いに行つただろさ。——ほ
 んに、もうお十夜だ——気むずかしい治兵衛の媼おばも、やかましい
 芸妓屋の親方たちも、ここ一日二日は講こうじゆう中ちゆうで出入りがやが

やしておるで、その隙ひまに密そつと逢いに行つたでしよ。」

「お安くないのだな。」

「何、いとしゆうて泣いてるだか、しつこくて泣かされるだか、知れたものではないのだよ。」

「同じ事を……いとしい方かたにしておくがいい。」

と客は、しめやかに言つた。

「厭いやな事だ。」

「大層嫌うな。……その執拗しつこい、嫉妬しつとぶか深いのに、口説くどかれたらお前は どうする。」

「横びんた撲はりこくるだ。」

「これは驚いた。」

「北国一だ。山代の巴板額ともえほんがくだよ。四斗八升の米俵、両手で二俵提げるだよ。」

「偉い！……その勢いきおいで、小春の味方をしておやり。」

「ああ、すべいよ、旦那さんが言わつしやるなら。……」

「わざと……いささかだけれど御祝儀だ。」

肩を振つて、拗すねたように、

「要らねえよ。——私うちこんなもの。……旦那さん。——旅行たびさき

で無駄な錢を遣わねえがいいだ。そして……」

と顔を向け直すと、ちよつと上まぶたで客を視みて、

「旦那さん、いつ帰るかね。」

「いや、深切しんせつは難ありがた有いが、いま来たばかりのものに、いつ出た

程つかは少し酷ひどかろう。」

「それでも、先刻さつき来た時に、一晚どまり泊だと言ったでねえかね。」

「まったくだ、明日は山やま中なかへ行くつもりだ。忙しい観光団さ。」

「緩ゆっくり居なさればいいに——では、またじきに来なさいよ。」

と、真顔で言った。

客はその言ことばに感じたように、

「勿論来ようが、その時、姐さんは居なからう。」

「あれ、何でえ？……」

「お嫁に行くから。」

したたか頭かぶりを掉ふつて、

「ううむ、行かねえ。」

「治兵衛坊主が、たつて欲しいと言うそうだ。」

「馬鹿を言うもんでねえ。——治兵衛だろうが、忠兵衛だろうが、……一生涯に行かねえで待つてるだよ。」

「じゃあ、いつそ、どこへも行かないで、いつまでもここに居ようか。私をお婿さんむこにしてくれれば。……」

「するともさ。」

「私は働きがないのだから、婿も養子だ。お前さん養つてくれるかい。」

「ああ、養うよ。朝から晩まですきな時に湯に入れて、御飯おまんまを食べさして、遊ばしておけばそれでよかろうがね。」

「勿もったい体ないくらい、結構だな。」

「そのくらいなら……私が働く給金でして進ぜるだ。」

「ほんとかい。」

「それだがね、旦那さん。」

「御覧、それ、すぐに変替だ。」

「ううむ、ほんとうだ、が、こんな上段の室では遣切れねえだ。」

——裏座敷の四畳半か六畳で、ふしようして下さんせ、お膳の御馳走も、こんなにはつかねえが、私が内証でどうともするだよ。

客は赤黒く、口の尖った、にきびで肥った顔を見つつ、

「姐さん、名は何と言う。」

と笑って聞いた。

「ふ、ふ、ふ。」と首を振っている。

「何と言うよ。」

「お措きなさい、そんな事。」

と耳みみたほ朶まっかまで真赤にした。

「よ、ほんとに何と言うよ。」

「お光だ。」

と、飯めしびつ櫃づに太い両手を突張つつばつて、ぴよいと尻もつたを持立てる。遁に

げがまえ構がまえでいるのである。

「お光さんか、年とし紀は。」

「知らない。」

「まあ、幾いくつ歳つだい。」

「顔だ。」

「何、」

「私の顔だよ、猿だてば。」

「すると、幾歳だっけな。」

「桃栗三年、三歳みっつだよ、ははは。」

と笑いながら駈出かけだした。この顔が——くどいようだが——楊貴

妃の上へ押並んで振向いて、

「二十はたちだ………いたち馳はだ………べべべべ、べい——」

四

ここに、第九師団衛戍病院えいじゆの白い分院がある。——薬師寺、
 万松園まんしようえん、春日山かすがやまなどと共に、療養院は、山代の名勝に入っ
 ている。絵はがきがある。御覧なさい。

病院にして名勝の絵になったのは、全国ここばかりであろうも
 知れない。

この日当りで暖かそうなが、青白い建ものの、門の前は、枯葉
 半ば、色づいた桜の木が七八株、一列に植えたのを境に、もう温い
 泉でゆの町も場末のはずれで、道が一坂小だかくなって、三方は見通
 しの原で、東に一带の薬師山の下が、幅の広い畷なわてになる。桂かつらだ
 谷にと言ふのへ通ずる街道である。病院の背後を劃しきつて、蜿々うねうね
 と続いた松まじりの雑木山は、畠を隔てたばかり目の前に近さきいか

ら、遠い山も、峻けわしい嶺みねも遮られる。ために景色が穏かで、空も優しい。真綿のように処々白い雲を刷はいたおつとりとした青空で、やや斜ななめな陽が、どことなく立渡る初冬の霧に包まれて、ほんのりと輝いて、光は弱い、まともに照らされては、のぼせるほどの暖かき。が、陰の袖は、そぞろに冷い。

その近ちかやま山の裾すそは半ば陰つたが、病院とは向う合せに、この隙すきから少し低く、下りめになつて、陽の一杯に当る枯草みぢの路みちが、ちよろちよろとついて、その径こみちと、隙すきの交叉こうさてん点てんがゆるく三角になつて、十坪ばかりの畑が一枚。見み霽はらしの野山の中に一つある。一方が広々とした刈田かりたとの境に、垣根もあつたらしいが、竹も塀もこわれこわれで、朽ちた杭くいばかり一本、せめて案山かかし子こにでも化け

たそうに灰色に残つて、尾花が、ぼうと消えそうに、しかし陽を満々と吸つて、あ、あ、長閑な欠伸のどかあくびでも出そうに、その杭もたに凭もたれている。藁わらが散り、木の葉が乱れた畑には、ここらあたり盛さかんに植える、杓子菜しやくしなと云つて、株の白い処ところが似ているから、蓮華菜れんげなとも言うのを、もう散々に引棄てたあとへ、陽氣あたたかが暖だから、乾いた土の、ほかほかともりあがつた処へ、細く青く芽をふいた。

畑の裾は、町裏まちやの、ごみごみした町家、農家が入乱れて、樹立こだちがくれに、小流こながれを包んで、ずっと遠く続いたのは、山中道みやちで、そこは雲の加減で、陽が薄赤く颯さつと射さす。

色も空も一淀ひとよどみする、この日溜ひだまりの三角畑の上ばかり、雲の瀬べにに紅べにの葉しがらが柵しがらむように、夥おびただ多ただしく赤蜻蛉あかとんぼが群あれていた。――

— 出会ったり、別れたり、うえした 上下にスツと飛んだり。あの、紅また薄紅、うつくしい小さな天女の、水晶の翼は、きらきらと輝くのだけれど、もう冬で……遊びもたけなわ 闌に、うっとり 恍惚したらしく、夢をさまよ 徜徉うように、ふわふわと浮きつ、沈みつ、ただよ 漾いつ。で、時々目がさめたように、パツと羽を光らせるが、またぼうとなつて、暖かに霞んで飛交う。

ひなた 日南の虹にじの姫たちである。

風情に見惚れて、みと 近江屋の客はただ一人、三角畑の角に立つて、山を背にめぐ 繞らしつつたたず インでいるのであつた。

あたり 四辺の長閑かさ。しかししずか 静な事は——すま 昼飯を済ませてから——あるき 買ものに出た時とは反対の方に——そぞろ歩行でぶらりと出て、い 温

泉の廓をでゆくわ一巡り、店さきのきらびやかな九谷焼、奥深く彩つた漆器店。両側の商店が、やがて片側になつて、媚なまめかしい、紅べにがら格子ご子を五六軒見たあとは、細流せせらぎが流れて、薬師山を一方に、呉くれは羽神社じんじやの大鳥居前を過ぎたあたりから、往来ゆきかう人も、来る人も、なくなつて、古ぼけた酒店さかみせの杉葉もとの下に、茶と黒と、鞠まりの伸びたほどの小犬が、上になり下になり、おつとりと耳を噛かんだり、ちよいと鼻づらを引ひっかき合つたり。……これを見ると、羨うらやましいか、桶おけの蔭から、むくと起きて、脚をひろげて、もう一匹よちよちと、同じような小狗こいぬは出て来ても、村の閑寂しじま間か、棒切ぼうぎれ持つた小児こどもも居ない。

で、ここへ来た時……前途山むこうの下から、頬ほ被おりした脊かぶの高い

草鞋わらじばきの親仁おやじが、柄の長い鎌を片手に、水だか酒だか、縄から
 げのいっしょうびん一升いっしょうびん罎びんをぶら下げたのが、てくりてくりと、噉くはを伝つたい、
 松茸まつたけの香を芬ぶんとさせて、蛇へびの莫ご塵ざと称となうる、裏白うすたかの葉かみを堆うずたかく装もつ
 た大籠おおかごを背負しょつたのを、一ツゆすつて通過つぎぎた。うしろ形つぎも、
 罎びんと鎌で調子を取つて、大手を振つた、おのずから意氣の揚々と
 した処は、山の幸を得た誇ほこりを示す。……籠かごに、あの、ばさばさ群
 った葉の中に、鯰なますのような、小鮎こふなのような、頭おおきの大たけな茸たけがびちび
 ち跳ねていそうなのが、温泉いでゆの町の方へずツと入つた。しばらく、
 人に逢つたのはそればかりであつた。

客ひなたは、陽ひなたの赤蜻蛉せきりやうに見惚みとれた瞳ひとみを、ふと、畑はたぎわ際ぎわの尾花おぼろに映うつす
 と、蔭かげの片袖かたそでが悚然ぞつとした。一度、しかとしめて拱こまぬいた腕うでを解ほどい

て、やや震える手さきを、小鬢こびんに密そつと触れると、喟然きぜんとして面おもてを暗うしたのであつた。

日南ひなたに霜が散つたように、鬢にちらちらと白毛しら毛が見える。その時、赤蜻蛉の色の真紅まっかなのが忘れたようにスツと下りて、尾花もとの下に、杭さきの尖とまに留つた。……一度伏せた羽を、衝つと張つた、きらりと輝かした時、あの緑の目を、ちよつと此方こなたへ振動かした。

小狗たわむれの戯なつかしにも可懐おきなごころんだ。幼心おきなごころに返つたのである。

教授は、ほとびるがごとき笑顔になつた。が、きりりと唇をしめると、真黒まっくろな厚い大な外套おおきがいとうの、背腰を屁びりに屈かがめて、及腰よびごしに右の片手を伸しつ、密そつと狙ねらつて寄つた。が、どうしてどうして、小児こどものように軽く行かない。ぎくり、しゃくり、いま

が大切、……よちりと飛附く。……南無三宝、赤蜻蛉は颯と外れた。

はつと思つた時である。

「おほほほほ。ははははは。」

花々しく調子高に、若い女の笑声が響いた。

向うに狗児の形も、早や見えぬ。四辺に誰も居ないのを、一

息の下に見渡して、我を笑うと心着いた時、咄嗟に洩面を造つて、

身を捻じるように振向くと……

この三角畑の裾の樹立から、広野の中に、もう一条、畷と傾

斜面の広き刈田を隔てて、突当りの山裾へ畦道があるのが屏風

のごとく連つた、長く、丈の高い掛稲のずらりと続いたのに蔽

われて、半ばで消えるので気がつかなかった。掛稲のきれ目を見ると、遠山の雪の頂が青空にほとぼしって、白い兔が月に駈けるようである。下も水のごとく、尾花の波が白く敷く。刈残した粟の穂の黄色なものと段々になって、立蔽う青い霧に浮いていた。

と見向いた時、畦の嫁菜を棲にして、その掛稲の此方に、目も遙な野原刈田を背にして間が離れて確とは見えぬが、薄藍の浅葱の襟して、髪つややの艶かな、色の白い女が居て、いま見合せた顔を、急に背けるや否や、たたきつけるように片袖を口に当てたが、声は高々と、澄切った空を、野に響いた。

「おほほほほ、おほほほ、おほほほほ。」

おや、顔に何かついている？……すべりを扱しごいて、思わず撫なで

ると、これがまた化かされものが狐に対する眉毛に唾と見えたるう。

金切声で、「ほほほほほほ。」

十歩ばかり先に立つて、一人男の連が居た。縞がらは分らないが、くすんだ装で、青磁色の中折帽を前のめりにした小造な、痩せた、形の粘々とした男であった。これが、その晴やかな大おわらいの笑声に驚いたように立留つて、廂睨みに、女を見ている。何を笑う、教授はまた……これはこの陽気に外套を着たのが可笑いのであろうと思つた……言うまでもない。——途中でな、誰を見ても、若いものにも、老人にも、外套を着たものは一人もなかつた。湯の廓は皆柳の中を広袖で出歩行く。勢なのは浴衣一

枚、裸はだか体も見えた。もつとも宿を出る時、外套はと気がさしたが、借りて着込んだ浴衣の糊のりが硬こわ々と突張つっぱつて、広袖の膚はだにつかないのが、悪く風を通して、ぞくぞくするため、すつぽりと着込んでいるのである。成程、ただ一人、帽子も外套も真ま黒くろに、畑に、つつくりと立った処は、影法師に狐が憑ついたようで、禪ぜんをぶら下げて裸はだかで陸おかに立ったより、わかい女には可笑おかしかろう……

いや、蜻蛉とんぼ釣つりだ。

ああ、それだ。

小鬢こびんに霜のわれらがと、たちまち心着いて、思わず、禁ぜざる苦笑を洩もらすと、その顔がまた合つた。

「ぷッ、」と噴出すように更に笑つた女が、堪たまらぬといった体ていに、

裾をぱツぱツと、もとの方へ、五歩六歩駈戻つて、捻じたよ
うに胸を折つて、

「おほほほほ。」

胸を反して、仰向けに、

「あはははは。」

たちまちくるりとうしろ向きに、何か、もみじの散りかかる小
紋の羽織の背筋を見せて、向うむきに、雪の遠山へ、やたらに叩
頭をする姿で、うつむいて、

「おほほ、あはは、あははははは。あはははははは。」

やがて、朱鷺色の手巾で口を蔽うて、肩で呼吸して、向直つ
て、ツンと澄して横顔で歩行こうとした。が、何と、自から目が

こつちに向くではないか。二つ三つ手巾に、すぶりをくれて、たきつけて、また笑った。

「おほほほほ、あははは、あはははははは。」

やつくち 八口を洩る紅に、腕の白さのちらめくのを、振つて揉んで身悶する。

きよろんと立った連の男が、一歩返して、ひとあし 圧えるごとくに、握拳にぎりこぶしをぬつと突出すと、今度はその顔を屈み腰かがに仰向いて見

て、それにも、したたかに笑ったが、またもや目を教授に向けた。教授も堪えずこたへ、ひとり寂しくニヤニヤとしながら、半ば茫然として立っていたが、余りの事に、そこで、うっかり、べかツこを遣ったと思え。

「きやつ、ひいッ。」と逆に半身を折って、前へ折曲げて、脾腹ひばらを腕で压えたが追着おツつかない。身を悶え、肩を揉み揉みへとへとになつたらしい。……畦の端の草もみじに、だらしなく膝をついた。半襟の藍に嫁菜が咲いて、

「おほほほほほ、あはははは、おほほほほほ。」

そこを両脇、乳も、胸も、もぞもぞと尾花がくすぐ撥る！ はだかる

襟の白さを合すと、合す隙に、しどけない膝小僧の雪を敷く。島しま田まだ鬻も、切れ、はらはらとなつて、

「堪忍してよう、おほほほほ、あははははは。」

と、手をふるはずみに、鳴子なるこなわ繩に、くいつくばかり、ひしとすが縫ると、刈田の鳴子が、山に響いてからからから、からからから

から。

「あはははははは。おほほほほほ。」

勃然とした体で、島田の上で、握拳の両手を、一度打擲をするごとくふつて見せて、むつとして男が行くので、はあはあ膝を摺らし、腰を引いて、背には波を打たしながら、身を蜿らせて、やつと立つて、女は褻を引合せぎまに振向くと、ちよつと小腰を屈めながら、教授に会釈をするが疾いか。

「きやあ——」と笑つて、衝と駈けぎまに、男のあとを掛稲の背後へ隠れた。

その掛稲は、一杯の陽の光と、溢れるばかり雀を吸つて、むくむくとして、音のするほど膨れ上つて、なお堪えず、おほほほほ、

笑声を吸込んで、遣切れなくなつて、はち切れた。稲穂がゆさゆさと一斉に揺れたと思うと、女の顔がぼつと出て、髪を黒く、唇を紅く、

「おほほほほほほ、あははははははは。」

「白痴奴、おどれ、
汝！」

ねつい、怒つた声いが響くと同時に、ハツとして、旧の路へ遁もとげ出した女の背に、つかみかかる男の手が、伸びつつ届くを、躲かわそうとしたのが、真横にばったり。

伸のしかかると、二ツ三ツ、ものも言わずに、頬とも言わず、肩とも言わず、男の拳が、尾花の穂がへし折れるように見えて打擲した。

顔も、髪も、土まみれに、真白な手を袖口から、ひしと合せて、おがんで縫って、起きようとする、腕を払って、男が足を上げ、一つ蹴た。

瞬くばかりの間である。

「何をする、何をする。」

たかが山家の恋である。男女の痴話の傍杖より、今は、高き天、広き世を持つ、学士榊三吉も、むかし、一高で骨を鍛えた向陵の健児の意気は衰えず、

「何をする、何をするんだ。」

草の径もどかしい。畦ともいわず、刈田と言わず、真直に突切って、颯と寄った。

この勢いに、男は桂谷の山手の方へ、掛稲を縫って、鳥とともに飛んで遁げた。

「おお。」

「あ、あれ、先刻の旦那さん。」

遁げた男は治兵衛坊主で——お光に聞いた——小春であった。

「外套を被つて、帽子をめして、……見違えて、おほほほほ、失礼な、どうしましょう。」

と小春は襟も帯も乱れた胸を、かよわく手でおさえて、片手で外套の袖に縋りながら、蒼白な顔をして、涙の目でなお笑った。

「おほほほほ、堪忍、御免なすつて、あははははは。」

妙齡だ。この箸がころんでも笑うものを、と慚然としつつ、

駒下駄が飛んで、はだしの清い、肩も膝も紅くれないの乱れた婦おんなの、半ば起きた肩を抱いた。

「御免なすつて、旦那さん、赤蜻蛉をつかまえようと遊ばした、
貴方あなたの、貴方の形が、余り……余り……おほほほほ。」

「いや、我ながら、思えば可笑おかしい。笑うのは当り前だ。が、気の毒だ。連つれの男は何という乱暴だ。」

「ええ、家うちではかえつて人目に立つツて、あの、おほほ、
中ちゆうの相談をしに来た処ところだものですから、あはははは。」

ひたと胸に、顔をうずめて、泣きながら、

「おほほほほほ。」

心しんじゆ

五

「旦那さん、そんなら、あの、私、……死なずと大事ございませんか……」

「——言うだけの事はないよ、——まるツきり、お前さんが慾ばかりでだましたのでみた処で……こつちは芸妓だ。罪も報もあるものか。それに聞けば、今までに出来るだけは、人情も義理も、苦勞をし抜いて尽しているんだ。……勝手な極道とか、遊蕩とかで行留りになった男の、名は体のいい心中だが、死んで行く道連れにされて堪るものではない。——その上、一人身ではないそうだ。——ここへ来る途中で俄盲目の爺さんに逢つて、おな

じような目の悪い父親があると云つて泣いたじやないか。」――

掛かけいね稲、嫁菜の、畦あぜに倒れて、この五尺の松に縋すがつて立つた、山代の小春を、近江屋へ連戻つた事は、すぐに領うなずかれよう。芸げいし妓やである。そのまま伴つて来るのに、何の仔細しさいもなかつたこともまた断るに及ぶまい。

なお聞けば、心中は、単に相談ばかりではない。こうした場所と、身の上では、夜中よりも人目に立たない、静しずかな日南ひなたの隙を計つて、岐路えだみちをあれからすぐ、桂谷へ行くと、浄行寺じようぎようじと云う門徒宗が男の寺。……そこで宵の間まに死ぬつもりで、対手あいての袂たもとには、商あきないものの、（何とか入らず）と、懐中には小刀ナイフさえ用意して

いたと言うのである。

うわまえ
上前の摺ずり下さがる……腰帯ゆるの弛ゆるんだのを、気にしいしい、片手
でほつれ毛を搔かきながら、少しあとへ退さがつてついで来る小春の姿
は、道行みちゆきから遁にげたとよりは、山奥ひとみごうの人身御供たすけだから助出たすけだされ
たものようであった。

左山中道みち、右桂谷道みちしるべ、と道程標おいわけの立つた追分おいわけへ来ると、—
—その山中道みちの方から、脊せのひよろひよろとした、頤あごの尖とがつた、
瘦やせこけた爺じいさんの、菅すげの一もんじ笠かさを真直まっすぐに首くびに据たえて、腰
に風呂敷包ふろしきをぐらつかせたのが、すあしに破脚絆やぶれぎやはん、草鞋穿わらしじばき
で、とぼとぼと竹の杖つえに曳ひかれて来たのがあった。

この竹の杖を宙そらに取とつて、さきを握にぎつて、前まへへも立たたず横添よこぞい

に導きつつ、くたびれ脚を引摺ったのは、目も耳もかくれるよう
 な大^{おおき}な鳥打帽の古いのをかぶった、八つぐらいの男の児^こで。これ
 も風呂敷包を中^{なか}結^{ゆわ}えして西^{さい}行^ぎ背^{よう}負^うに背負^じっていたが、道^{みちな}
 中^かへ、弱々と出て来たので、横^ひに引^ひ張^{っぱり}合^あった杖^あが、一方通せ
 ん坊になつて、道^{みち}程^{しるべ}標^べの辻^つの処^ちで、教授は足を留めて前へ通し
 た。が、細^せ流^{せらぎ}は、これから流れ、鳥居は、これから見え、町も
 これから賑^{にぎ}か^やだけけれど、俄^つめ^つくらと見えて、突^つ立^つた足^たを、こぶ
 らに力を入れて、あげたり、すぼめたりするように、片手を差出
 して、手探りで、巾^{きん}着^{ちやく}ほどな小^こ児^{ども}に杖^{てい}を曳^ひかれて迎^{むか}ひ^たる状^{さま}。い
 ま生命^{いのち}びろいをした女でないと、あの手を曳いて、と小春に言っ
 てみたいほど、山家の冬は、この影よりして、町も、軒も、水も、

鳥居も暗く黄昏たそがれた。

駒下駄のちよこちよこあるきに、石段下、その呉羽の神の鳥居の蔭から、桃割ももわれぬれた結立ゆいたてで、緋鹿子の角絞ひがのこ つのしほり。簪かんざしをまだささず、黒繻子の襟くろじゆすの白粉垢おしろいあかの冷たそうな、かすりの不断着をあわれに着て、……前垂まえだれと帯の間へ、古風に手拭てぬぐいを細く挟こまかんだ雛妓おしやくが、殊勝にも、お参詣まいりの戻もどりしい……急足いそぎあしに、つつと出た。が、盲目めくらの爺さんとつとすれ違つて前へ出たと思うと、空から抱留められたように、ひたりと立留つて振向いた。

「や、姉ちゃん。」——と小児こどもが飛着く。

見る見るうちに、雛妓の、水晶のような睜みはつた目は、一杯の涙である。

小春は密と寄添うた。

「姉ちゃん、お父ちゃんが、お父ちゃんが、目が見えなくなるから、……ちよつと姉ちゃんを見てえつてなあ。……」

西行背負の風呂敷づつみを、肩の方から、いじけたように見せながら、

「姉ちゃん、大すきな豆の餅あんもを持って来た。」

ものも言い得ず、姉さんは、弟のその頭つむりを撫なでると、仰いで笠うちの裡じつを熟と視みた。その笠を被かぶつて立てる状さまは、かかる苦界にある娘に、あわれな、みじめな、見すばらしい俄盲目には見えないで、しなびた地藏菩薩じぞうぼさつのようであつた。

親仁おやしは抱しめもしたそうに、手探りに出した手を、火傷やけどしたか

と慌てて引いて、その手を片手おがみに、あたりを拝んで、誰ともなしに叩頭おしぎをして、

「御免下され、御免下され。」

と言った。

「正念寺様におまいりをして、それから木賃へ行くそうです。いま参りましたのは、あの妓こがちよつと……やかたへ連れて行きましたの。」

突つきあたり 当あたり らしいが、横町を、その三人が曲りしなに、小春が行きすがりに、雛妓おしやくと囁ささやいて「のちにえ。」と言って別れに、さて教授にそう言った。

——来た途中の俄盲目は、これである——

やがて、近江屋の座敷では、小春を客分に扱って、膳を並べて、教授が懇ねんごろに説いたのであつた。

「……ほんとに私、死ななくても大事ございませんわね。」

「死んで堪たまるものか、死ぬ方が間違つてるんだ。」

「でも、旦那さん、……義理も、人情も知らない女だ、薄情だと、言われようかと、そればかりが苦になりました。もう人が何と言いましよう、旦那さんのお言ことばばかりで、どんなに、あの人から責められましても私はきつぱりと、心中なんか厭いやだと言います。

お底かけさまで助りました。またこれで親兄弟のいとしい顔も見られ

ます。もう、この一年ばかりこのかたと言いますもの、朝に晩に泣いてばかり、生きた瀬はなかつたのです。——その苦みくるしも抜けました。貴方は神様です。仏様です。」

「いや、これが神様や仏様だと、赤蜻蛉の形をしているのだ。」

「おほほ。」

「ああ、ほんとに笑つたな——もう可よし、決して死ぬんじやないよ。」

「たとい間違つておりましたも、貴方のお言ことばばかりで活いきます。

女の道に欠けたと言われ、薄情だ、売女ばいただと言う人がありまして

も、……口に出しては言いませんけれど、心では、貴方のお言葉

ゆえと、安心をいたします。」

「あえて構わない。この俺が、私と言うものが、死ぬなど言ったから死なないと、構わず言え。——言つたつて決して構わん。」

「いいえ、勿体ない、お名ふだもおねだり申して頂きました。人には言いはしませんが、まあ、嬉しい。……嬉しゅうございますわ。——旦那さん。」

「……………」

「あの、それですけれど……安心をしましたせいですか、がっかり落胆して、力が抜けて。何ですか、余り身体からだにたわいがなくなつて、心細くなりました。おそばへ寄せて下さいまし……こんな時でございませんと、思い切つて、お顔が見られないのでございませんですけど、それでも、やっぱり、暗くて見えはしませんわ。」

と、膝そつに密と手を置いて、振仰にいだらしい顔がほの白い。艶濃つやこき髪かおりの薫より、眉がほんのりと香においそうに、近々とありながら、上段の間は、いまほとんど真暗まつくらである。

六

実は、さきに小春を連れて、この旅館へ歸つた頃に、廊下あを歩あ行き馴なれたこの女が、手を取つたほど早や暗くて、座敷かろうも辛かじてあいろ黒白あの分るくらいであつた。金屏風きんびょうぶとむきあつた、客きやくの脱だつすてを掛けた衣い桁この下もとに、何なにをしていたか、つぐんでいて、道陸神どうろくじんのような影を、ふらふらと動かして、ぬいと出たものがあつた。

あれと言った小春と、ぎよつとした教授に「北国一。」と浴せ掛あびけて、またたく間に廊下をすつ飛んで行ったのは、あのお光であつたが。

すぐ直に小春が、客の意を得て、例の卓上電話で、二人の膳を帳場に通すと、今度注文をうけに出たのは、以前の、齒を染めた寂しいおんな婦で、しよんぼりと起居たちいをするのが、何だか、産女うぶめ鳥のように見えたほど、——時間はさまでもなかつたが、わけてこの座敷は陰気だつた。

頼もしいほど、陽氣にぎやに賑かなのは、廂ひさしはずれに欄干の見える、崖の上の張出しの座敷で、客も大勢らしい、四五人の、芸妓の、いろいろな声に、客のがまじって、唄う、弾く、踊っていた。

船の舳みよしの出たように、もう一座敷重かさなつて、そこにも三味線さみせんの音がしたが、時々哄どっと笑う声は、天狗てんぐが舂こたまを返すように、崖下の庭は暮れるものを、いつまでも電燈がつかない。

小春の藍あいの淡い襟、冷い島田が、幾度いくたびも、縁を覗のぞいて、ともに燈ともしを待ちもした。

この縁の突当りに、上敷うわしきを板に敷込んだ、後架こうかがあつて、機械口の水も爽さわやかだったのに、その暗紛れに、教授が入った時は一滴ちようずの手水も出なかつたので、小春に言うのと、電話までもなく、帳場へ急いで、しばらくして、真鍮しんちゆうの水さしを持って来て言うのには、手水は発動機で汲くみあげている処、発電池に故障があつて、電燈もそのために後おくれると、帳場で言っているそうで。そこで中な

縁かえんの土間おおきの大な石の手水鉢、ただし落葉が二三枚、不思議に燈籠ともしに火を点したように見えて、からからに乾いて水はない。そこへ誘つて、つき膝で、艶えんになまめかしく颯さつと流してくれて、

「あれ、はんけちを田圃道たんぼみちで落して来て、……」

「それも死神の風呂敷だったよ。」

「可こ恐わいわ、旦那さん。」

その水さしが、さて……いまやつぱり、手水鉢の端はたに据すわつてい
るのが幽かすかに見える。夕暮さきぐの鷺さぎが長い嘴くちばしで留とどつたよう
で、何となく、水の音も、ひたひたとするようだったが、この時、木菟みみずくのよう
になつて、とつぷりと暮れて真暗まっくらだった。

「どうした、どうした。……おお、泣いているのか。——私は……」

「あああれ、旦那さん。」

と、かわや厩の板戸を、内から細目に、小春の姿が消えそうに、

「私、つい、つい、うっかりして、あのお恥かしくって泣くんですわ……ここには水がありません。」

「そうか。」

と教授が我が手で、その戸を開けてやりつつ、

「こつちへお出で、かけてやろう。さ。」

「は。」

「可いいか、十分に……」

「あれ、どうしましょう、勿体ない、私は罰が当ります。」

懐紙に二階の影が散る。……高い廊下をちらちらと燭しよくだい台の

火が、その高たか楼どのの欄干てすりを流れた。

「罰の当ったはこの方だ。——しかし、婦人おんなの手に水をかけたの

は生れてからはじめてだ。赤ん坊になつたから、見ておくれ。お

庇かげで白髪が皆消えて、真ま黒くろになつたろう。」

まことに髪が黒かつた。教授の顔の明るさ。

「この手水鉢は、実盛さねもりの首くび洗あらいの池も同じだね。」

「ええ、縁起でもない、旦那さん。」

「ま、姦まおとこ通め。ううむ、おどれ等。」

「北国一だ。……危あぶえよ。」

殺した声と、呻うめく声で、どたばた、どしんと音がすると、万歳と、向むこう二階で喝采やんや、ともろ声に喚わめいたのとほとんど一所に、赤い電燈でんとうが、蒟蒻こんじやくのようにぶるぶると震えて点ついた。

七

小春の身を、背かばに庇かばつて立った教授けうじゆが、見ると、繻子しゆすの黒足袋くろあしふくの鼻緒はなごずれに破れた奴やつを、ばたばたと空そらに撥はねる、治兵衛坊主ちへいゑぼうずを真俯まうつむ向けに、押伏おしふせて、お光あかが赤蕪あかかぶのような膝ひざをはだけて、のしかかっているのである。

「危い——刃ものを持つてるぞ。」

絨毯 じゅうたん

を縫いながら、治兵衛の手の大小刀が、しかし赤黒

い電燈に、

錆蝮 さびむかで

のように蠢くのを、事ともしないで、

「何が、犬にも牙 きばがありや、牛にも角があるだあね。こんな人間

の刃ものなんぞ、どうするかね。この馬鹿野郎。それでも私が来

ねえと、大事なお客さんに怪我をさせる処だっけ。飛んでもねえ

嫉妬野郎 やきもちやろう

だ。 でけ

大い声を出してお帳場を呼ぼうかね、旦那さん、

どうするね。私が一つ横ずっぽう撲 はりこくってやろうかね。」

「ああ、静 しずかに——乱暴をしちや不可 いけない。」

教授は敷居へ、内へ向けて引きながら、縁側の籐椅子 とういすに掛けた。

「君は、誰を斬るつもりかね。」

「うむ、おどれ汝から先に……あたりまえ当前おどれじゃい。うむ、放せ、くやし口惜いわい。」

「迷惑をするじゃあないか。旅の客が湯治場のげいしや芸妓を呼んで遊んだが、それがどうした。」

「おどれ汝、俺の店まで、呼出しに、汝、あいびき逢曳にうせおつて、まおとこ姦通め。」

「血迷うな、誤解はどうでも構わないが、君は卑劣だよ。……使った金子かねに世の中が行詰ゆきづまつて、自分で死ぬのは、間違いにしる、勝手だが、死ぬのに一人死ねないで、未練にも相手の女を道づれにしようとして附絡つけまとうのは卑劣じゃあないか。——投出いのちす生命に女の連つれを拵こさえようとするしみつたれさはどうだ。出した祝儀に、

利息を取るよりけちな男だ。君、可愛い女と一所に居る時は、蚤のみが一つ余計に女にたかつて、ああ、おれの身をかわりに吸え、可哀想だと思ふが情だ。涼しい時に虫が鳴いても、かぜを引くなよ、寝冷ねびえをするなど念じてやるのが男じゃないか。——自分で死ぬほど、要らぬ生命いのちを持つているなら、おなじ苦労をした女の、寿命のさきへ、鼻毛をよつて、継つぎ足たしをしてやるが可い。このうつくしい、優しい女を殺そうとは何事だ。これ聞け。俺も、こんな口を利いたつて、ちつとも偉い男ではない。お互に人間の中の虫だ。——虫だが、書物ばかり食つてゐる、しみのような虫だから、失礼ながら君よりは、清潔きれいだよ。それさえ……それでさえ、聞けよ。——心中の相談をしている時に、おやじが蜻蛉釣とんぼる形の

可笑おかしさに、道端へ笑い倒れる妙齡としごろの気の若さ……今もだ……う
 つかり手水ちようずに行つて、手を洗う水がないと言つて、戸を開け得
 ない、きれいな女と感じた時は、娘のような可愛さに、唇の触つ
 たばかりでも。」

「ううむ、ううむ。」と呻うなつた。

「申訳にしのなさに五体が震える。何だ、その女に対して、隠元、田
 螺にしの分際で、薄汚い。いろも、亭主も、心中も、殺すも、活いかすも
 あるものか。——静しずかにここを引揚げて、早く粟津の湯へ入れ——
 自分にも二つはあるまい、生命いのちの養生をするが可いい。」

「餓鬼めが、畜生！」

「おっと、どっこい。」

「うむ、放せ。」

「姐ねえさん、放しておやり。」

「危あぶねえ、旦那さん。」

「いや、私はまだその人に、殺されも、斬られもしそんな気はない。お放し。」

「おお、もつともな、私がこの手を押えているで、どうする事も出来はしねえだ。」

「さあ、胸を出せ、袖を開けろ。私は指一つおさ圧おさえていない。婦人おんなが起たつてそこへすが縋れば、話は別だ。桂清水かつらしみずとか言うので顔を洗つて私も出直す——それ、それ、見たが可いい。婦人おんなは、どうだ、椅子の陰へ小さく隠れて、身を震わしているじゃあないか。——

「帰りたまえ。」

また電燈が、滅びるように、呼吸いきをひいて、すつと消えた。

「二人とも覚えてけつかれ。」

「この野郎、どこから入った。ああ、——そうか。三畳の窓を潜くぐつて、小ちっこい、庭にわ境ざかいの隣家となりの塀から入ったな。争まわれぬもんだつてば。……入った処から出て行くだからな。壁かを摺ずつて、窓を這はつて、あれ板塀にひつついた、とかげ野郎。」

小春は花のいきするように、ただ教授の背後うしろから、帯に縋たつて、さめざめと泣いていた。

ここの湯の廓くるわは柳がいい。分けて今宵は月夜である。五株、六株、七株、すらすらと立ち長く靡なびいて、しつとりと、見附みつけを繞めぐつて向合う湯宿が、皆この葉越はこしに窺うかがわれる。どれも赤い柱、白い壁が、十五間間口けん、十間間口、八間間口、大きな（舎）という字をさながらに、湯煙ゆけむりの薄い胡粉ごふんでぼかして、月影に浮いていて、蕙いらかの露も紫に凝るばかり、中空に冴さえた月ながら、氣の暖かさにおぼろ朧である。そして裏に立つ山に湧わき、処々に透く細い町に霧が流れて、電燈の蒼い砂子を鏤すなごめた景色は、広重ひろしげがピラミツドの夢を描いたようである。

柳のもとには、二つ三つ用心水みずの、石で亀甲きっこうに囲みつた水みずのまま

溜りの池がある。が、涸れて、寂しく、雲も星も宿らないで、一面に散込んだ柳の葉に、山谷の落葉を誘って、塚を築いたように見える。とすれば月が覗く。……覗くと、光がちらちらとさすので、水があるのを知って、影が光る、柳も化粧をするのである。分けて今年あたたかは暖さに枝垂れた黒髪はなお濃こまやかで、中にも真まんなか中に、月光を浴びて漆のように高く立った火の見階子ばしごに、袖を掛けた柳の一本ひともとは瑠璃るりてんじよう天井の階子段に、遊女の凭もたれた風情がある。

このあたりを、ちらほらと、そぞろ歩行あるきの人通り。見附正面の総湯の門には、浅葱あさぎに、紺に、茶の旗が、納手拭おさめてぬぐいのように立って、湯の中は祭礼まつりかと思う人声の、女まじりの賑かさ。——だぶだぶと湯の動く音。軒前のきさきには、駄菓子店みせ、甘酒の店、飴あめの湯、

水菓子の夜店が並んで、客も集れば、湯女も掛ける。髯が啜る甘酒に、歌の心は見えないが、白い手にむく柿の皮は、染めたささ蟹の糸である。

みな立つ湯気につつまれて、布子も浴衣の色に見えた。

人の出入り一盛り。仕出しの提灯二つ三つ。紅いは、おで

ん、白いは、蕎麦。横路地を衝と出て、やや門とぎす湯宿の軒を

伝う頃、一しきり静になった。が、十夜をあての夜興行の小芝居

もどりにまた冴える。女房、娘、若衆たち、とある横町の土

堀の小路から、ぞろぞろと湧いて出た。が、陸軍病院の慰安のた

めの見物がえりの、四五十人の一行が、白い装でよぎったが、霜

の使者が通るようで、宵過ぎのうそ寒さの再び春に返ったのも、

更に寂然せきぜんとしたのであつた。

つきよがらす
月夜鴉つきよがらすが低く飛んで、水を潜くぐるように、柳から柳へ流れた。

「うざくらし、厭いやな——お兄あにさん……」

芝居がえりの過ぎたあと、土塀際の引込んだ軒下に、潜くぐりど戸を細目に背にした門かどぐち口に、月に青い袖、帯黒く、客を呼ぶのか、招くのか、人待顔に袖を合せて、肩つき寒く佇たたずんだ、影のような婦おんながある。と、裏の小路からふらりと出て、横合からむずと寄つて肩を抱いた。その押つぶしたような帽子の中の男の顔を、熟じつとすかして——そう言った。

「お門かどが違ちがうやろね、早はやう小春さんのとこへ行く事や。」と、格子の方へくるりと背く。

紙屋は黙つて、ふいと離れて、すぐ軒ならびの隣家の柱へ、腕で目をおさえるように、帽子ぐるみ附着いた。

何の真似やら、おなじような、あたまから羽織を引かぶつた若い衆が、溝を伝うて、二人、三人、胡乱々々する。

この時であつた。

夜も既に、十一時すぎ、子の刻か。——柳を中に真向いなる、

門も鎖し、戸を閉めて、屋根も、軒も、霧の上に、苦掛けた大船

のごとく静まつて、梟が演戲をする、板歌舞伎の趣した、近江屋

の台所口の板戸が、からからからと響いて、軽く迂ると、帳場が

見えて、勝手は明い——そこへ、真黒な外套があらわれた。

背後について、長襦袢するすると、伊達巻ばかりに羽織とい

う、しどけない寝乱れ姿で、しかも湯上りの化粧の香が、月に脈うって、ぽつと霧へ移る。……と送って出しなの、肩を叩こうとして、のびた腰に、ポンと土間に反った新しい仕込みの鯔ぼらと、比ひ目魚らめのあるのを、うっかり跨またいで、怯おびえたような脛はぎ白く、莞爾にっこりとした女が見える。

「くそつたれめ。」

見え透いた。が、外套が外へ出た、あとを、しめざまに細ほっそりに見送る処を、外套が振返って、頬ほずりをしようとする、あれ人が見る、島田を揺ふって、おくれ毛とともに背いたけれども、弱々となつて顔を寄せた。

これを見た治兵衛はどうする。血は火のごとく鱗うろこを立てて、逆さかさま

に尖^{とが}つて燃えた。

途端に小春の姿はかくれた。

あとの大戸を、金の額ぶちのように背負^{しよ}つて、揚々として大得意の体^{てい}で、紅^{こうけい}閨のあとを一散歩、贅^{ぜい}を遣^やる黒外套が、悠然と、柳を眺め、池を覗^{のぞ}き、火の見を仰いで、移^{うつり}香^がを惜^{おし}げなく、酔^{えい}ざましに、月の景色を見る状^{さま}の、その行く処には、返^{かえり}咲^ぎの、桜が咲き、柑子^{こうじ}も色づく。……他^{よそ}の旅館の庭の前、垣根などをぶらつきつつ、やがて総湯の前に近づいて、いま店をひらきかけて、屋台^{なべ}に鍋をかけようとする、夜^よなし^の饅^う饨^{どん}屋^やの前に来た。

獺^{かわうそ} 橋^{はし}の婆さんと土地で呼ぶ、——この婆さんが店を出すのでは……もう、十二時を過ぎたのである。

犬ほどの蜥蜴とかげが、修羅もやを燃して、煙のように颯さつと襲った。

「おどれめ。」

と呻うめくが疾はやいか、治兵衛坊主が、その外套の背後うしろから、ナイフを鋭く、つかをせめてグサと刺した。

「うーむ。」と言うと、ドンと倒れる。

瀬橋の婆さんが、まだ火のない屋台から、顔を出してニヤリとした。串じょうだん戯ごだと思つたらう。

「北国一だ——」

と高く叫ぶと、その外套の袖が煽あおつて、紅あかい裾すそが、はらはらと乱れたのである。

九

——「小春さん、先刻さつきの、あの可愛い雛妓おしやくと、盲目めくらの爺とつさんたちをここへお呼び。で、お前さんが主人になつて、皆みんなで湯へ入つて、御馳走を食べて、互に慰めもし、また、慰められもするが可い。

治兵衛坊主は、お前さんの親たち、弟に逢つた事はないか。——なければそれもなお好都合。あの人たちに訳を話すと、おなじ境きようがい界がいにある夥間なかまだ、よくのみ込むであろうから、爺さんをお前さんの父親、小兒こどもを弟に、不意に尋ねて来た分に、治兵衛の方へ構えるが可よい。場合によれば、表向き、治兵衛をここへ呼んで

逢わせるも可^よかろう。あの盲^{めし}いた人、あの、いたいけな児^こ、鬼も見れば角がなごむ。——心配はあるまいものの、また間^{まち}違^がないとも限らぬ。その後^{こうなん}難^{なん}の憂^{うれ}慮^いのないように、治兵衛の氣を萎^{なや}し、心を鎮めさせるのに何よりである。

私は直ぐに立つて、山中へ行く。

わざとらしいようでもあるから、別室へと思わぬでもなければ、さてそうして、お前は爺さんたちと、ここに一所に。……決して私に構うなど言つた処で、人情としてそうは行くまい、顔の前に埃^{ほこり}が立つ。構わないにしても氣が散ろう。

泣きも笑いもするがいいが、どっちも胸をいたためぬまで、よく樂^{たの}み、よくお遊^しび。——

あの陰気な女中を呼ぶと、沈んで落着いただけに、よく分つて、のみ込んだ。この趣を心得て、もの優しい宿の主人も、更めて挨拶に來たので、大勢送出す中を、学士の近江屋を発程したのは、同じ夜の、実は、八時頃であつた。

勿論、小春が送ろうと言つたが、さっきの今で、治兵衛坊主に對しても穩でない、と留めて、人目があるから、石屋が石を切つた処、と心づもりの納屋の前を通る時、袂を振切る。……

お光が中くらいな鞆を提げて、肩をいからすように、大跨に歩行いて、電車の出発点まで真直ぐに送つて來た。

道は近い、またすぐに出る処であつた。

「旦那さん、蚤のみにくわれても、女あまツ子は可哀相だと言ったが、ほんとかね。」

停車場じょうちやうの人ごみの中で、だしぬけに大声でぶツつけられたので、学士はその時少なからず逡巡しつつ、黙つて二つばかり点頭うなづいた。「旦那さん、お願いだから、私に、旦那さんの身についたものを一品としな下んせね。鼻紙でも、手巾ハンケチでも、よ。」

教授は外套を、すつと脱いだ。脱ぎはなしを、そのままお光の肩に掛けた。

このおもみに、トンと圧おされたように、鞆を下へ置いたなりで、停車場を、ひよいと出た。まさか持ったなりでは行くまいと、半ば串じょうだん戯だだったのに——しかし、停車場を出ると、見通しの細

い道を、いま教授がのせたなりに、ただ袖に手を掛けたばかり、長い外套の裾をずるずると地に曳摺ひきずるのを、そのまま、不思議に、しよんぼりと帰って行くのを見て、おしげなくほろりとして手を組んだ。

発車した。

——お光は、夜の隙よひまのあいてから、これを着て、嬉しがって戸外もてへ出たのである。……はじめは上段の間へ出向いて、

「北国一。」

と、まだ寝ないで、そこに、羽二重の厚あつ衾ふすま、枕を四つ、頭あわせに、身のうき事を問い、とわれ、睦言むつごとのように語り合う、

小春と、雛妓おしやく、爺さん、小児こどもたちに見せびらかした。が、出る時、小春が羽織を上うへに引っかけたばかりのなりで、台所まで手を曳ひいた。——ああ、その時お光のかぶったのは、小児の烏打帽であつたのに——

黒い外套を来た湯女ゆなが、総湯の前で、殺された、刺された風説うわさは、山中、片山津、粟津、大聖寺だいしょうじまで、電車で人とともに飛んでたちまち響ひびいた。

けたたましい、廊下の話声を聞くと、山中温泉の旅館に、既に就寝中だった学士が、白いシイツをは刎はねて起きた。

寢床から自動車を呼んで、山代へ引返して、病院へ移つたという……お光の病室の床に、胸をしめて立つた時、

「旦那さん、——お光さんが貴方あなたの、お身代り。……私はおくれました。」

と言つて、小春がおもはゆげに泣いて縊すがつた。

「お光さん、私だ、榊だ、分りますか。」

「旦那さんか、旦那さんか。」

と突拍子な高調子で、譎うわごと言のようにつたが、

「ようこそなあ——こんなものに……面つらも、からだも、山猿ひに火ひ熨の斗しを掛けた女だと言われたが、髪の毛ばかり皆みんなが賞ほめた。もう要らん。小春さん。あんた、油くさくて気の毒やが、これを切つて、旦那さんに上げて下さんせ。」

立会つた医師が二人まで、目しばたを瞬たいて、学士に会釈しつつ、う

なずいた。もはや臨終だそうである。

「頂戴しました。——貰ったぞ。」

「旦那さん、顔が見たいが、もう見えんわ。」

「さ、さ、さ、これに縋らっしゃれ。」

と、ありなしの縁えんに曳かれて、雛妓この小とみ、弟が、かわいい名の小次郎、ともに、杖まで戸惑いしてついて来て、泣いていた、盲目めくらの爺さんが、竹の杖を、お光の手に、手さぐりで握らせるようにして、

「持たっしゃれ、縋らっしゃれ。ありがたい仏様が見えるぞい。」

「ああい、見えなくなつた目でも、死ねば仏様が見られるかね。」

「おお、見られるとも、のう。ありがたや阿弥あみ陀様。おありがた

や親鸞しんらん様も、おありがたや蓮れんによ如様も、それ、この杖に蓮華の花が咲いたように、光つて輝いて並んでじゃ。さあ、見さつしやれ、拜まつさしやれ。なま、なま、なま、なま、なま、なま。」

「そんなものは見とうない。」

と、ツト杖を向うへ刎はねた。

「私は死んでも、旦那そばさんの傍そばに居て、旦那さんの顔を見るんだよ。」

「勿体ないぞ。」

と口のうちにつぶや呟つぶやいて、爺おやじが、黒い幽霊のように首を伸のして、杖に縋つつて伸上のつて、見えぬ目を上うわねむりに見据みえたが、

「うんにや、道理もつともじゃ。俺おらも阿弥陀仏より、御開山より、娘の

顔が見たいぞいの。」

一 いっさん 山の大導師、な 一体の聖者のごとく見えたのであった。その風采ふうさいや、さながら

大正十二（一九二三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二巻」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

みさごの鮫

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>